



社団法人

# 海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

2006年12月発行(3ヵ月1回発行)

第33号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

●日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援 ●貧しい国々での医療活動を支援 ●各国大使館との協力などによる文化講演会の主催

RMIT Gallery

The RMIT Gallery Board and  
RMIT Gallery Director Suzanne Davies  
in conjunction with Professor George Gish,  
President of the International Culture Appreciation  
& Exchange Society, Tokyo are pleased to  
invite you to the opening of

## NIHONGA

To be opened by Penny Hutchinson  
Director, Arts Victoria

Opening 6 – 8 pm Wednesday 29 November  
RSVP 03 9925 1717 / rmit.gallery@rmit.edu.au  
Exhibition dates 29 November to 9 December 2006



### ■ 「メルボルンからの報告」

ジョージ・W・ギッシュ (社) 海外と文化を交流する会会長

30年前に松岡朝女史及び当会の関係者が蒔いた種が今年の暮れにやっと芽生え始めた。当時オーストラリアに寄贈された25点の極めて優れている日本画の作品が今回展示すべき会場であるビクトリア州議会議事堂のQueen's Hall (QH)の壁に11月20日から24日までに鮮やかに飾ることになりました。この喜ぶべき出来事を可能にしたのは、大勢の方々の長年の情熱と努力によるものでした。特に、一年以上前から様々な企画や手続きを丁寧に準備してきた大谷常務理事と中野理事の並々ならぬご苦労によって全ての行事がうまく運ばれました。

メルボルン入りしたのは11月19日の朝でした。ホテルのロビーで待っている間に日本領事館の広報文化センター(JICC)の岩田慎也所長が20日のQHでの日本画展のオープニング・レセプションの招待状を持ってきました。その晩、松岡恒太郎夫妻と食事をしながらスケジュールを確認しました。20日の午後岩田さんと打ち合わせるために、領事館へ伺いました。幸い、ホテルから近くにありましたので、早く着きまして、加来至誠総領事と会う機会がありました。暫らくの間、本会の歴史や活動及び松岡朝女史と日本画の経緯などを話すことが出来ました。その問題点も加来総領事がよく理解してくれていることが分ると、心強い気持ちとなりました。そして、岩田氏と細かい日程を確認し、JICCのスタッフにも紹介されて、皆様が非常に協力的でした。

ホテルに戻って急いで準備して、恒太郎達とタクシーでQHの会場へ行きました。そこで当会の顧問佐藤純一教授ご一家と会って、初めて25点の日本画と直面しました。言葉にならないほどの感動でした。いくら印刷が綺麗とは言っても本物には及びません。そして、照明とパネルなどのセッティングはそれぞれの作品を鮮やかに活かされました。所々の額縁に30年の歳月を感じさせる傷みがありました

が、幸いに絵そのものには損傷はありませんでした。関係者が少しずつ会場に現れると皆がその 25 点の日本画の素晴らしさに息を飲むほどでした。

その VIP の中には、29 年前の贈呈式の主役を務めた R.J.ヘイマー・ビクトリア州首相の未亡人エープリル・ヘイマー女史が特別に出席されました。

展覧会のオープニングはビクトリア州議会の最初の女性議長 Judy Maddigan (ジュディー・マディガン) 下院議長の歓迎挨拶の後、アーツ・ビクトリアの Penny Hutchinson (ペニー・ハチンソン) 芸術省長官の司会で三人の短い挨拶が求められました。まず、本会の代表として、私が紹介され、それに次いで加来総領事とビクトリア州議員 Mary Delahunty (メアリー・デラハンティアー) 芸術大臣の暖かい挨拶が述べられました。その会場での私の挨拶は次の通りです。

It is with extreme pleasure to join with your distinguished Minister for the Arts, the Honourable Mary

Delahunty, in the honour of welcoming all of you to the Opening of this unique Exhibition of Nihonga art works that were commissioned some 30 years ago by our Society to be donated as gifts “from the heart of Japan” to the people of Australia under the custodianship of the good people of Victoria.

The 25 artists who contributed these works represent the leading contemporary Nihonga artisans of their time. More than a third of them have been decorated with the Order of Culture by the Japanese government.

The world of Nihonga art has a long and varied history representing a number of styles that combine the influences of both ancient Eastern art with features of modern Western cultures. It is of interest to note the continuity of pre-modern Nihonga styles with the contemporary popular art of anime as represented in the current exhibition of “Tezuka Manga” at the National Gallery of Victoria.

I would like to take this occasion to invite all of you to the first Symposium in Australia on Nihonga art history and techniques to be held in the afternoon of November 29 at the Japan Information and Cultural Centre (JICC) where Mr. Shinya Iwata is Director. Prof. Masatsune Hojo will be coming from Tokyo to demonstrate the actual methods of Nihonga painting techniques that utilize entirely natural pigments and animal glues in the production.

Hopefully, this return Exhibition will be the beginning of a new chapter in cultural cooperation and



↑ 会場 QH クイーンズホールのある議事堂  
↓ 挨拶するジュディー・マディガン下院議長



understanding between the peoples of Australia and Japan. May these 25 Nihonga works be the catalyst for an ongoing program of educational exchange between students and teachers of the arts that will lead to new and exciting creative works in the future.

In closing, let me give due credit to the vision and leadership of the two key persons who initiated this cultural exchange. It was your Honourable Premier, Sir Rupert James Hamer, who received this Nihonga Collection in 1977, stating that these works “must add lustre to the (National) Gallery’ s collection as a whole.” Although the final home of this collection is still uncertain, we trust that under the care of such persons as Mary Delahunty, along with the Arts Victoria staff and related university persons, these works will find a central role in the future of art education in Australia. It was Minister Mary Delahunty who proposed this superb venue in Queen’ s Hall, and then Michael Nation among others who made this a reality.

The final person to recognize is the late founder of our Society, Dr. Asa Matsuoka. Our Society is now led by her daughter, Yuko Matsuoka, (an artist in her own right) who unfortunately could not make this trip. But speaking on her behalf, as well as representing our Society members and supporters in Japan, I am proud to lift up Lady Asa Matsuoka as the model of one who dedicated her life to building bridges for international peace and goodwill.

As the first Japanese woman in prewar Japan to receive a Ph.D. from Columbia University, her studies and interests ranged from social work to administering art galleries. During WWII, she went to Nanjing, China, where she established institutions for children and displaced persons, and after the war became the founder of the Japan UNICEF. She was already in her 80’ s when she undertook the project to persuade the leading Nihonga artists to contribute these 25 works commissioned for this collection.

May the zeal and dedication of these two outstanding individuals inspire those of us here, as well as the succeeding generations, to continue to hold fast to their vision in concrete and creative ways, both today and in the future. Personally, I think it would be appropriate for this to be named the “Matsuoka-Hamer Nihonga Collection.”

And now, I would like to introduce the grandson of Asa Matsuoka, the youngest Executive Director of our Society, Tsunetaro Matsuoka, and his wife Hiroko. Tsunetaro would like to greet you with a few words.

Our Society would like to thank all of you who have made this Nihonga Exhibition at Queen’ s Hall a reality. Thank you.

松岡恒太郎氏の言葉の後、加来総領事とデラハンティー大臣も挨拶を述べて、レセプションが盛り上がりました。朝女史の孫とヘイマー首相の未亡人が並んで日本画を鑑賞しながら記念写真が撮られるのを拝見しながら、その風景は本会の過去と未来を象徴的に表していると思いました。

次の日の午後、恒太郎ご夫妻と一緒に本会の顧問であられる日野原重明先生と数名の関係者を迎える為に又 QH へ参りました。偶然に日野原先生の講演の日程と日本画展が重ならなかったら、先生方にこの歴史的展覧会を案内することが出来なかった。非常に光栄でした。

後半の活動が 26 日から始まりました。その晩、北條先生ご夫妻と、大谷教授、中野理事、岡田さんとチャイナ・タウンで食事をしながら、今までの報告をいたしました。27 日の午後、日本領事館で岩田さんと打合せをした後、その夜、岩田さんの招待で、「はなびし」の食堂で、メルボルンにおける日本文化の情勢を理解する為に、日本と深い関係があるお二人の美術と音楽の専門家と相談することが出来ました。将来、本会と在メルボルンの協力者との連絡を密にすることがあれば、新しい活動の可能性が

生まれると感じました。例えば、日本画の取り扱いを監視する信頼出来る協力者が現地に得られれば、非常に助かると思いました。その上に、美術教育の交換プログラム等にも手伝ってもらうことも出来ます。

「日本画」に関する教育交換の可能性を検討するランチョンが 28 日のお昼アーツ・ビクトリアの本庁で開かれました。メルボルン市内と周辺にある大学の美術や国際交流などの担当並びに代表者との意見交換が出来ました。この話し合いには、北条先生が大活躍しました。その後、近くのビクトリア芸術大学に案内されました。そこで、日本と既に交流している教授と学生に出会いました。

いよいよ、今回の活動の中心である「日本画シンポジウム」の準備に没頭しました。北條先生を始め、岩田さんと JICC のスタッフが一生懸命会場作りを整えて、受講生の予想以上の申し込みがあり、会場の関係上相当数の方を受け入れることが出来なかった。29 日午後 2 時半になると、領事館の会議室が大勢の人で埋められました。大谷先生の司会の下で、そのプログラムが進みました。前半は、私の短い「文化の違いから学ぶ」の話から、北條先生が日本画の歴史と特長を説明しました。後半の具体的な「日本画づくり」のデモンストレーションには、皆が圧倒されました。その場で、日本画を自分で画きたいという希望を表した何人かの方がいました。その情熱が、午後 6 時からの RMIT（王立メルボルン工科大学）ギャラリーの会場までに及びました。

RMIT の展示会は、QH でのオープニングと違って、勿論、VIP がいましたが、一般の市民と学生が大勢来られました。これこそ、今回の主な目的でした。私の RMIT 展の挨拶にも言いましたが、『今日のシンポジウムを始め、今夜の RMIT の展示会も、私たちの「海外と文化を交流する会」のこれからの 30 年の新しい出発点でもあります』。今までの日本とオーストラリアとの国と国との間で起こった様々な傷みの歴史を共有する事から学び合いながら、それぞれの「文化の素晴らしい違い」から学び合うことによって、いままで以上に、新しい想像力を働かせて、今回の「日本画展とシンポジウム」が刺激となって、新しい芸術の表現が創造されるきっかけになれば、私たちばかりではなく、本会の創設者松岡朝女史も何よりも喜ぶであろう。

最後に、オーストラリアの女性たちのパワーを感じました。私を含めて日本を代表した人は全て男性でした。然しながら、相手国のトップ代表者たちは、皆女性でした。そして、朝女史の話を聞いたオーストラリアの女性たちの反応は、極めて良かったです。「非常に感激しました」とか「大変励みになった」などの言葉を耳にしました。「松岡朝女史は私たち現代の人々の模範と目標でもある」。これには、男性も、女性もありません。皆が同じ生き方を目指す者です。本会のこれからのヴィジョンにおいても再確認が出来たような気がします。

## ■メルボルン滞在記

大谷俊介 （社）海外と文化を交流する会常務理事

メルボルンでの日本画展覧会（2006 年 11 月 20 日～12 月 30 日）は大成功と言っても良いであろう。私は仲間と一緒に 11 月 27 日の週に参加した。以下はその簡単な参加報告であり、いくつかの印象に残ったことをあとに述べる。

メルボルン滞在報告（2006 年 11 月 27 日～12 月 1 日）



メンバー（敬称略）：北條夫妻、Gish、岡田、中野、大谷

**11月27日**：Working Dinner、会食メンバーは Alison Tokita（時田、Monash 大学助教授、日本研究学会会長）と Lesley Kehoe（日本美術商）、この2人は日本留学の経験あり。日豪交流の積極的応援団。岩田領事、Gish、北條、大谷。交流の進め方などを話し合った。

**11月28日**：Arts Victoria (AV) 事務所で昼食相談会。AV側から Penny Hutchinson (Director), Michael Nation (Manager)。他に在メルボルンの美大先生6人、岩田、外山、Gish、北條、中野、大谷。先生の中に Neil Malone 氏（Head of Printmaking, Vic.Col.of Arts—東京芸大との版画交流の責任者）。大学間交流に関して意見交換。希望があれば当会が橋渡し。王立メルボルン工科大学（RMIT）ギャラリーでの展示準備を視察。日本画が無雑作に重ねられていた。数点の額に傷が見られた。

**11月29日**：午前、大谷が NHK の取材を受ける（RMIT と Rialto ビル内港湾事務所）。午後シンポジウム（聴衆 50 名満員札止めの大盛況）、北條画伯の熱演に大好評。夜、AV 主催レセプション。NHK の取材は終日続いた。

**11月30日**：加来総領事に面談（大谷）、今後の協力を依頼。

**12月1日**：AV にて今後の相談。Eleanor Whitwirth (Project office), Hutchinson, Nation, Gish, 大谷。AV はビクトリア州内（美大）ギャラリーで巡回展を考えている。当会からの提案として全豪内で展示すること。NZ Canterbury 美術館とも相談する。この件 AV で前向きに検討。日本画の管理取扱い方法を日本側から教示すること。以上を文書で確認することにした。夜、岩田氏を招いてホテル内中野室にてギッシュ会長の古希祝いを兼ねてさよならパーティ。

以上、領事館の岩田、外山両氏の献身的協力に感謝。おつかれさまでした。

今回つぶさに日本画 25 点と感動的な対面をした。そして注意深く観察した。どれもが素晴らしい絵であるが、多くの額縁に傷が見られ痛ましい思いがした。しかし、長時間の粗末な保管にもかかわらず幸いにも絵本体は無事であった。これは額装が立派であったことと、湿気の少ない国に置かれていたためであろう。

日本総領事館、広報文化センター内で 11 月 29 日に開かれた「日本画 日本の美」シンポジウムは満員大盛況。聴衆には美大の学生や先生、美術館の専門員が多く含まれていた。圧巻は北條正庸画伯による日本画の画材と技法に関する実演付きレクチャーで多くの聴衆に感銘を与えた。この日には NHK シドニー支局からカメラマンを含め 3 人が駆けつけ終日取材した。

12 月 1 日の Arts Victoria (AV) での打合せでは、日本画の今後の取扱いに関して意見交換。AV 側に当会からの希望を強く表明する必要がある。このままにしておくと同様また「お蔵入り」になってしまうであろう。ひとつの案として全豪内の主要美術館に貸し出して分散展示するのも良かろう。もし先方が持て余すようなら、数点を返してもらい、それを売って当会の財源としたらどうかとの酒飲み話も出た。例えば 2 億円で売り、それでオーストラリア国債を買えば利回り 7% で年間 1400 万円の当会の収入となる。これは本音も含む冗談ではあるが、この仕事を天国の松岡朝女史がはたしてお喜びになるであろうか。

長時間に及ぶ NHK の取材は結局短くまとめられ、12 月 4 日（月）の「おはよう日本」内で「息吹き返す“失われた日本画”」というタイトルの特集として放映された。私が前面に出すぎて良い気持はしなかったが、松岡朝女史の偉業がここでアピールできたことは間違いないであろう。そして、さすがに全国放送、その反響の大きさには驚かされた。

以上、今回のメルボルン行は忙しい旅であった。それでも広東料理やベトナム、イタリア料理を楽しんだ。牡蠣やキング・ロブスターはもちろんのこと駝鳥やカンガルーなどの豪州料理も美味であった。ワインも安くてうまかった。つぎにはのんびり、ゆっくりとメルボルンを楽しみたいものだ。

準備を含め2年にわたる当会のメルボルン日本画展のプロジェクトは多くの方たちの暖かい協力を得て成功裡に終りつつある。しかし、大切なのはむしろこれからである。美術に関心のある（若い）会員を集めたい。その人たちが過去の偉業を誇りにしながら、その遺産にすぎりつくことなく、今回のプロジェクトから一歩踏み出して新しい展開を図ってもらいたいと切に願う。

## ■報告書

北條正庸 日本画家・創画会会員・多摩美術大学教授

「日本画と日本の美」に関するシンポジウムを開催のため、豪州メルボルンを訪れた。

29年前にオーストラリア政府に贈った25点の日本画を、当初の計画では、常設してもらはずであったのが、所在不明となり、時間が経て、当時の担当者もその作品からはずれ、作品群は置き去りにされた状態であったという。

しかし、このたび、いろいろな経緯をたどりながら、両国の人々の尽力により、25点の作品すべてが発見され、再び陽の目を見ることになった。

その25点の作品が現在どのような状態になっているか、画面の損傷はないか、今後どのような作品保存が必要であるか、などを確認することと、豪州の人々に寄贈された日本画を理解していただき、日本を代表する現代の作家の作品を大切に取扱う意識と、日本画という特殊な技法で描かれた作品であることを認識しての保存であってほしい、との目的もあり、日本メルボルン領事館においてシンポジウムと日本画についてのレクチャーをおこなうこととなった。

「日本文化と美術」のシンポジウムと「日本画と技法について」のレクチャーは、予定どおりおこなわれた。

前日には会場の設定とレクチャー用の道具の準備、関係者との打ち合わせと懇親会があり、当日の午前は報道関係の取材を受け、午後に設備と用具と進行手順の再確認を終了。2時半より、前半はシンポジウム約1時間半（別紙1）の内容でおこなった。

当日から RMIT 大学のアートホールで NIHONGA 展のオープンとなっていて、シンポジウム出席の対象者は豪州のこれから

た美術界の担い手である若い人々、現地美術系大学の学生を中心にと考えていた。しかし時期がオース



↑デモをする北條画伯と紹介する大谷常務理事



↑聴講生たちは真剣に向き合っていた

トラリアの夏季休暇と重なり、学生の参加者は少なかった（10名ほど）が、意外にも日本画への関心度は高く、会場の都合で50名の定員になり、ウェイティングリストには30名ほど、他は断る状況であった。大半はオーストラリアの方々であった。参加者リストも作られていて、それによれば美術の関係者が多く来場されていたが、たいへん良いことであったように思う。今後の日本画25点についての関心についても希望もてる兆しである。

シンポジウム終了後、同会場の形状を変えて、レクチャー会場の設定をおこなった。休憩を挟み、約1時間半のレクチャーと質疑応答の時間をとった。「日本画とその技法」のレクチャー内容は別紙2である。

質疑応答では多くの日本画の伝統技術に関心をもった質問があり、さらに美術関係者の方々からは専門的技術の質問や、他分野への技術の応用などの難問もあり、充実したレクチャーとなった。予定した時間では準備していったものを十分紹介できなかったことはたいへん心残りであった。

終了後も参加者からの質問が相次ぎ、日本文化の出版物による紹介だけではなく、目で見、耳で聞く、そして実体験できる交流の必要さを強く感じた一日となった。大学の関係者からはこのようなレクチャーを今後も期待するという願いもだされ、予想以上の関心の深さであった。

さらに、憂国からのRMIT大学アートホールでのNIHONGAの展覧会会場には、多くのオーストラリアンたちが参加、観覧していた。日本画の絵の美しさの前に、シンポジウムとレクチャーにも参加していた方々からは、絵の具の美しさ、箔の美しさ、その技術に賛辞が起こっていた。やまと絵の流れを汲む先輩たちの作品が一点の透きもなく、日本の美と文化を、オーストラリアの地で誇らしげに紹介しているように見えたのは、たいへんに印象的であった。

このたびの派遣の成果にはメルボルンに到着翌日におこなわれた、当地の美術部門のある大学関係者との交歓交流にも見られた。

昼食をとりながらフリートークをする機会が、ビクトリア州政府のアートディレクター所長の声掛けで設けられた。ビクトリア州を代表する3大学の代表の方々の参加によって、今後の大学間交流も視野にいった話し合いがおこなわれた。

会合後に、メルボルン大学のアートカレッジ校舎にも案内を受け、夏季はちょうど学年終了期にあたるため、終了制作展がおこなわれており、力のこもったオーストラリアの学生の作品を見ることができた。

この二つの機会は大きな収穫であった。

また、学生の展示をとおして、オーストラリアという建国の歴史にも関わる多民族の国の縮図を見るようで、興味深かった。

今回の派遣で多くの成果をあげることができたのは「海外と文化を交流する会」の委託を受けての事業であり、この会が日本文化を海外に示してきた事業軌跡と多大な業績に裏打ちされていたからであろう。

このたびの働きは小さなものではあるが、この一つ一つの積み重ねが今後も必要であり、また長い歳月で成果を上げていくことがたいせつであると感じる。29年前に贈られた日本画25点が、本当の意味で有効の架け橋になるのは、これからではないか。そのために協力を惜しまなかった作家の方々や家族・遺族の方々にも報いることになるはずである。

私自身、同じ作家の立場として強く感じたことは、贈られた作品の質の高さに驚き、寄贈を実現させた松岡朝さんの熱意を感じて、作家たちも心をこめて描いた作品であることを確信する、すばらしいものであった。当時この事業に関わられた方々の力ある資質と人格の高さに深く敬意を表したい。そして

この派遣に際して、多くの協力を惜しみなくくださった現地の方々の力強い後押しに、心から感謝と御礼を申し上げたい。

また、国際交流基金の文化人派遣事業の意義についても十分な成果をもって果たすことができたことは、報告書のとおりである。

(別紙1)

シンポジウムの内容 「日本文化と美術」

- ① あいさつ、このシンポジウムの経緯
- ② 日本の文化と心
- ③ 日本画について、そのルーツと軌跡
- イ) 中国および朝鮮の絵画とやまと絵
- ロ) やまと絵の美
- ハ) やまと絵の特徴と現代
- ニ) 現代マンガとやまと絵のつながり
- ホ) 日本人の心の拠り所と色彩

(別紙2)

日本画のレクチャーの内容「日本画とその技法」

- ① 日本画の自然体について
- ② 日本画の科学性について
- ③ 日本画材料の説明
- ④ 日本画の技法について
- イ) 胡粉について
- ロ) 箔について
- ⑤ 実演（胡粉のとき方、箔打ち）
- ⑥ 質疑応答

## ■麻田鷹司先生、塩出英雄先生との再会

北條ミチ子 北條画伯夫人・タイトルの両氏のご夫妻の美大での先生

「先生、お久しぶりです。お会い出来てとてもうれしいです」

30年前に見た、筆づかい、そのままの美しい作品だった。

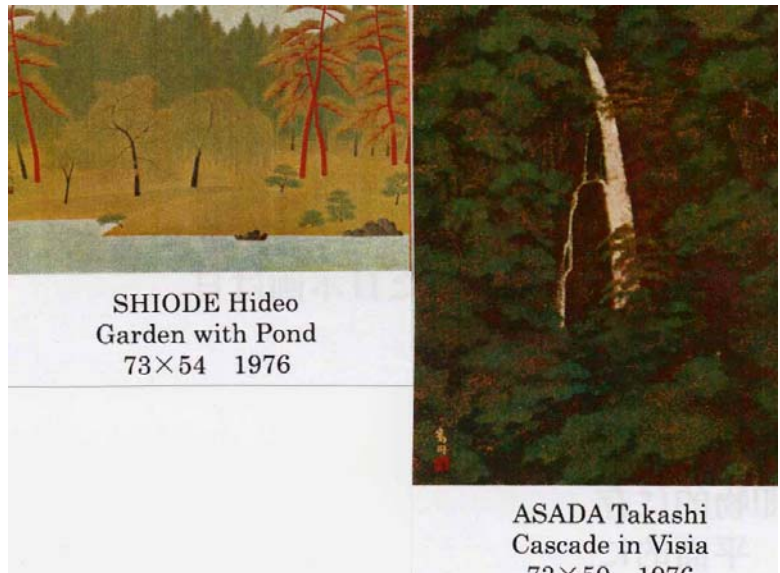
メルボルンでの永い時。

先生の手から離れてオーストラリアまでの永い旅。

オーストラリアの光にも変化することもなく、美しく、静かに、存在するその絵の前に立ち、なつかしく、幸福な思いに満たされました。

松岡朝さんの大きな働きによってオーストラリアまで運ばれた作品を見ている

と、今は、失われた命がこの作品を通して、はれやかに語っているように思われ、松岡さんの愛がなければなしえなかったことを、30年前にも吹いていた風に、「ありがとう」と、メルボルンを、後にしました。



## ■文化のメッセージとして蘇る日本画——日豪交流年記念現代日本画展に思う

佐藤純一 (社) 海外と文化を交流する会顧問・国際メタテクノロジー研究所長・工学博士



オーストラリア・ヴィクトリア州議会議事堂に入っすぐ正面、高いドーム天井からさしこむ陽光の下、奥にヴィクトリア女王の石像が立つクイーンズホールの四方を白いパネル壁で囲んで、30年前に太平洋戦争で相対した日本の本当の理解を得、日豪両国の人々のしつかりとした関係を願って、松岡 朝がまさに孤軍奮闘の努力で贈呈を実現した 25 点の日本画が一同に集まり、日本文化の空間を作っていた。

奥村土牛、川崎小虎、橋本明治、山口華揚、高山辰雄をはじめ錚々たる作家のしかもほとんどが松岡の熱意に意気を感じてそのために筆をとったという。

この日本画空間につきつぎと来られるオーストラリアの方々、在豪の日本の方々と歓談している間に、いつのまにか夕方六時となり芸術大臣主催のレセプションが始まった。優しい、母親の雰囲気を用意された芸術大臣の挨拶のあと、海外と文化を交流する会を代表してギッシュ会長から日本画を通じて両国文化の交流をはかり、相互理解を広げ、深めることを訴えられ、続いて松岡恒太郎常務理事から祖母に当たる松岡 朝の活動のモチーフとこれを次世代に引き継ごうという思いをこめたスピーチ、加来日本総領事の流れるような英語のあいさつなどでセレモニーが進んだ。そのあと参加メンバーはそれぞれにかんだんをしたり、気にいった絵の前で記念写真をとったり、これからの日豪文化の交流に相応しい雰囲気を楽しんだ。折りしも今、日豪二国間の経済・貿易協定のさなかにあつて、つい一週間前には両国の関係閣僚、政府高官等で会合がもたれたばかりと聞いた。ところで政治、経済といった現実レベルで真の意味で協力、交流していくためには、何より両国の人々が心の底から信頼感でつながれることが前提となろう。そしてそれには互いに相手側の文化、伝統を理解し、認め合わねばならない。

象徴の意味を哲学的に追求した哲学者カッシーラがいみじくも喝破しているように、文化や伝統といった全体的なもの、いかに精緻化された学問、あるいは言語のロゴスによってはとらえきれない限界がある。即ち、言葉あるいはロゴスで「多くの個々の「物」へ細分化された有様でのみ捉えようとする立場にとどまっている限り、そうした意味の連関はわれわれには見えてこない」という。

まさに松岡 朝は日本画という芸術的具象によって、ロゴスではなく全体性をもって日本の文化を伝えるいわば表意文字としてメッセージを伝えようとした。そしてその前に立つと絵が内包する日本文化が見る人それぞれに全体性を失わずに伝じて伝わってくる。私は、この松岡 朝の鋭い直観とこれを実現した実行力にこころからの敬意と感謝を表したい。

平成 18 年 12 月 8 日

## ■—メルボルンの地から—

松岡恒太郎 (社) 海外と文化を交流する会理事

「いっそドカーンと全部あげちゃいましょうよ」ケタはずれの”肝っ玉ばあちゃん”であると当時の毎日新聞の記者は表記した。

天然資源のお世話になっているオーストラリアに日本の文化を紹介しようと当会の理事会で提議されたのがきっかけで、日本画を贈呈することになったわけである。

当時私は 6 歳、あまり記憶はない。

祖母は行動の人である。日本画の画家をひとり一人訪ね始めたのは 1974 年 6 月、資金不足もあり材料費だけ当会が負担するという無理な注文にも関わらず、皆、趣旨を話すと喜んで引き受けてくれたそうである。80 代の祖母が重い虎屋の羊糞を風呂敷に包み、画家の奥様と親しくなり、作品制作の順番を上げていただいたエピソードも母から伝え聞いている。そして 1977 年秋、寄贈の時を迎えた。

先日日豪交流年の記念イベントとして、これら 25 点の絵が再びメルボルンで展示されることになった。妻と共に訪豪し、会長の Gish 先生と一緒にメルボルン、ビクトリア州議事堂のクイーンズホールに向かう。議事堂の正面階段を上る、妻は和服の為上りづらそうであったが我々の気分は晴れ晴れしたものであった。

25 点の絵は大きなホールに展示されていた。私は古い友人に久しぶりに再会した時のように、少しはにかみながら対面した。保存状態の問題もあり発色の劣化が危ぶまれたが、山本倉丘画伯の椿は咲いたばかりを描写したかのごとく、鮮明な発色で輝いていた。

レセプションは日本側から加来総領事、当会会長 Gish 先生、オーストラリア側からデラハンティービクトリア州芸術大臣などの挨拶が滞りなくおこなわれた。

会場には、サプライズゲストがおられた。オーストラリア側の粋な計らいである。祖母が絵を寄贈した相手、ヘイマー首相の未亡人エープリル夫人である。

きっちりした足取りでそれぞれの絵を鑑賞され、私が塩出英雄画伯の絵の前

で事前に北條先生からお借りした緑の岩絵具をお見せして説明したところ、「まあ、きれい！」とおっしゃられ、楽しそうにご覧になっておられた。



↑ 左からギッシュ会長、エープリル夫人、松岡夫妻

今回議事堂には 2 度ほど訪れる機会を得たが、閉館前のひっそりと静まりかえったホールでのある光景が忘れられない。それは、議事堂の職員の女性が、ホール内に展示された絵を 1 つ 1 つ丁寧に眺めている姿である。その光景はきらびやかな式典の 1 場面ではなく、有名な絵画展の 1 シーンでもなかったが純粋に日本画 1 点 1 点を興味深く眺める姿は、長く私の脳裏に記憶されるであろう。

今後、絵の有効活用には様々なアイデア、意見がでることと思う。

今まではパブリックに開放されていなかったから、なおさらであり一般の方に広く開放されることを切に願う。その為にも行動をおこす必要がある。

25 点の絵を通して、日本を、日本の美しい自然を思い浮かべていただく機会が両国の文化交流を益々発展させることであろう。

「たった 1 点の絵画でも、それを前に話し合えばお互いの気持ちがなごむ、文化交流とはそんなものです。」と祖母が生前語ったように。

## ■ホンモノの感動

中野真逸郎 (社) 海外と文化を交流する会理事

正直、自分の眼力のなさにうんざりした。印刷物でしか見ていなかった現代の日本画 25 もの至宝が、RMIT ギャラリーの壁にたてかけられて、床に無雑作に置かれている。それでも、色の深み、迫ってくる迫力が感動を呼んだ。

10 年ちょっと前、大谷俊介常務理事から海外と文化を交流する会に入会させられて、はじめて会のパンフレットの作成に関わったときに、印刷物で 25 点の日本画から 2 点、転載した。以後、なんどとなくカタログを見ている。カタログの印刷はたいへんに立派にできている。だが、ホンモノには遠く及ばない。実物そのものが持っている品格に圧倒される。メルボルンの地で、ホンモノにやっと巡り逢えた。

下世話に言えば、これらの値段は How Much? 美術評論家に調べてもらった価格は、オークション値段で、つまり画商が仕入れる価格で 8 億前後といわれた。それを末端価格として計算すると 30 億～35 億円。嗚呼。

そう広くないメルボルンの街は、歩き回るのにたいへんにいい。老人になってくると、散歩したくなる。とりわけおいしいワインを飲んだ翌朝は、つまり毎朝になるのだが、散歩する。ドクターの忠告は、代謝促進に歩きなさい、と。朝 5 時から街を歩いた。1800 年代の建物が数多く遺っている。教会はもつと古い。そんななかに新しい建物も挟まれていたりし、それがうまく調和を保っている。新しく伝統を積み上げていく豪州そしてメルボルンに、日本の伝統美を伝える現代の日本画は、日豪にいい調和をもたらしてくれるはずだ。街を歩きながら、そんなことを考えた。

松岡裕子専務理事が、豪州に寄贈した日本画 25 点の扱いにたいへん不安をおぼえておいでで、どうにかしたい、と折に触れて悲願をのべていらっしゃった。行方をつきとめるのに、3 年以上はかかっている。日豪交流年を教えてくれた日本商工会議所の友人が、外務省の大洋州課長を紹介してくれ、たぐって行ってメルボルン領事館が行方を探ってくれた。

かつての偉業取材してもらうために、先輩や友人たちに知恵を借りた。貧乏社団ゆえ、公的援助を求めるのに、やはり先輩や友人に力を借りた。大勢の先輩、友人、知人がいなければ、ホンモノの感動は得られなかった。ありがたいものだ。

## 会からの報告 & お知らせ & お願い

### ■「日本画そして日本の美」シンポジウム再演

日豪交流年の 2006 年、11 月 25 日から豪州メルボルンで開催されて巡回されている (社) 海外と文化を交流する会寄贈 25NIHONGA 展は多くの豪州人を魅了しています。そして特別に開催した「日本画そして日本の美」(北條正庸画伯デモンストレーション+ジョージ・W・ギッシュ講演) は大好評でした。

(社) 海外と文化を交流する会では、このきっかけをつくってくれた 30 年前の関係者や現在の会員の方々に、感謝の会を企画しているさいちゅうです。2～3 月、表記のシンポジウム再演と懇

親会のおしらせをお楽しみに。

## ■青盛のぼるチャリティコンサート

2007年5月18日（金）、東京・赤坂の霊南坂教会で、ソプラノ歌手青盛のぼるさんのコンサートを予定しています。

ごく最近、青盛のぼるさんのリサイタルを聴きにいった会員の感想——最近、海外公演でマダム・バタフライの主演を演じた後は、一段と声に磨きがかかり、こんどの海外と文化を交流する会コンサートは、大好評だった前2回のコンサートを以上に、皆さまを魅了するでしょう。

## ■寄付をいただきました

渡辺いつ子さまから日豪交流年メルボルン記念展へ、M&Dからもご寄付をいただきました。

## ■会費納入のお願い

2006年度の年会費納入さらに2004年度2005年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

ことしは「メルボルン日本画展」およびシンポジウム実行という大きな事業を大成功させました。さらに将来、日豪両国の芸術専攻生の教育交流にも発展させたいと考えています。ぜひご支援ください。

郵便振替 00130-2-366249 社団法人海外と文化を交流する会

銀行振込 三菱東京UFJ銀行渋谷支店（普）2266599 海外と文化を交流する会  
会費 10,000円（正会員） 5,000円（特別賛助会員） 3,000円（学生会員）

海外と文化を交流する会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パインビル内

TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org

<http://www.kaigai-bunka.org>



